

手術室看護師のストレスの実態

中央手術室 小野 幸子 坂本 陽美 中村 加代子

有馬 裕美子 森山 栄子

はじめに

手術室は、器械出しなどの特殊な専門的技術、効率良く行動するための的確な判断、かつ迅速な行動が要求される部署であり、看護職の中でも特に強いストレスにさらされている部署といわれている。

これまでに当手術室の職場環境におけるストレスに関する調査は行われていない。そこで私たちは、手術室での経験年数の違いや、年齢によってストレスの感じ方に差があるのではないかと考え、ストレスの実態を調査・分析したので報告する。

I 研究目的

当手術室看護師のストレスの実態を明らかにする。

II 研究方法

1 研究期間 平成19年11月～平成20年7月

2 対象 手術室看護師20名(師長を除く)

3 研究方法

「職業性ストレス簡易調査表」「自覚症状調べ」「疲労の内容調べ」を用いた質問紙法による量的研究。

III 結果

1 職業性ストレス簡易調査表による結果、40～47歳は「心理的な仕事の負担(質)」「自覚的な身体的負担度」の点数が高く、35～39歳は「イライラ感」「抑うつ感」「身体愁訴」の点数が高かった。経験年数1年目は「心理的な仕事の負担(質)」「働きがい」「疲労感」「不安感」の点数が高かった。

2 自覚症状調査表の結果、全体では「目が疲れる」「目が乾く」「目がしょぼつく」「横になりたい」「腰が痛い」「足がだるい」が、点数が高かった。

3 疲労度調査表の結果、全体の意見として「立ちっぱなしが辛い」「医師のイライラを感じる時」「スタッフのイライラを感じる時」「責任が重い」「特殊な手術につく」の順番で高かった。年齢では、10項目に有意差がみられた($P<0.05$)。経験年数では、27項目のうち20項目に有意差がみられ($P<0.05$)、年齢では有意差がなく、経験年数のみで有意差が見られた項目のほとんどは術式・手技に関する内容であった。

IV 考察

ストレス調査で、40～47歳は「心理的な仕事の負担(質)」の点数が高く、これは職場の人間関係・環境調整などの役割があるためと考える。35～39歳は、「イライラ感」「抑うつ感」「身体愁訴」が高値を示している。経験年数を重ねるとリーダー業務につき、仕事のコントロールの役割と責任を求められるためと考える。経験年数1年目は「心理的な仕事の負担(質)」「疲

労感」「不安感」の点数が高く、これは環境・業務への不慣れ、自己の未熟さや、知識・技術不足から不安・疲労感が増大していると考えられる。自覚症状調査では、全体で「目が疲れる」「目が乾く」「目がしょぼつく」「横になりたい」「腰が痛い」「足がだるい」の点数が高かった。手術室内は空調が回っているため空気が乾燥傾向にあり、また無影灯下でものを見たり、術野から目を離せないことが要因となっていると考える。「腰が痛い」「足がだるい」の項目に関しては、手術中は限られた範囲での立位業務を強いられ、座る余裕がなく、また座ることが困難な環境から発生するものであると考える。疲労度調査では、全体の意見として「医師のイライラを感じる時」「立ちっぱなしが辛い」「スタッフのイライラを感じる時」「特殊な手術につく」「責任が重い」の順番で高かった。25～29歳と経験年数1年未満は「スタッフのイライラを感じる時」「医師のイライラを感じる時」「経験不足による不安」の点数が高く、スタッフ間の関わりや、医師との関わりにおけるストレスを抱えていることがわかった。現場では医師・看護師が緊迫した状況にあり、精神的疲労を増していると考えられる。医師は緊張した手術場面では、安心して術野に専念したいと思い、器械出し技術に対して厳しくなる。一方、経験年数の浅い看護師は新しく覚える器械・技術・知識・医師との連携プレーの難しさに戸惑いを感じ、一生懸命勉強してもスムーズな器械出しができない。経験年数の浅い看護師のストレスは、技術・知識の習得の度合いが関わっており、技術・知識の習得を自己の課題とし専門性を高めることでストレスの軽減につながると考える。経験年数5年以上は全員が30代で、点数が低かった。経験年数が5年以上になると手術室のおおかたの環境に慣れ、状況把握を行い自己判断で行動できる年代であり、経験の浅い看護師に比べ、不安・疲労感が低い結果となったと考える。

V 結論

1 当手術室看護師の疲労度は「医師のイライラを感じる時」「立ちっぱなしが辛い」「スタッフのイライラを感じる時」「特殊な手術につく」「責任が重い」の順番で高かった。

2 経験年数の浅い看護師は、術式・手技に関してストレスを感じている。

3 経験年数1年未満の看護師と、25～29歳の看護師が、スタッフ間の関わりや、医師との関わりにおけるストレスを抱えている。